

# 東アジア地域における龍身白澤図像の伝播と受容

——西安戸県の白澤像を中心に——

岡 部 美沙子

## The Spread and Acceptance of Dragon Body Hakutaku Icon in East Asia

Focusing on Xian Huxian's Hakutaku Statue

OKABE Misako

“Hakutaku (Baize 白澤)” is a divine animal that appears in ancient Chinese mythology. In China, Hakutaku's icon has been expressed like “tiger's head and dragon's body” or “dragon's head and animal body”. This icon spreaded from China to Korea. And it has been handed down. In contrast, Hakutaku icon is expressed like “human face and ox body” in both Japan and Ryukyu (琉球). Xian (西安) Huxian (戸県) 's Hakutaku statue show us two kinds of possibility. The one can provide the evidence for the ox body Hakutaku, which appears in China, the other can show the possibility Hakutaku and Kirin (Qilin 麒麟) that is made up a pair.

キーワード：白澤 西安戸県 萇陽宮 白澤補 龍身 牛身

### はじめに

「白澤（はくたく）」は中国で生まれ、朝鮮・日本・琉球といった東アジア各国へ伝播した神獣である。白澤の初出は『山海経』や『石鼓文』など諸説ある<sup>1)</sup>が、遅くとも東晋の葛洪『抱朴子』には確実にその名が記されている<sup>2)</sup>。

白澤は黄帝神話・伝説の中で、黄帝の前にその姿を現し様々な鬼神について語ったとされる。唐の王瓘『軒轅本紀』（張君房編『雲笈七籤』所引<sup>3)</sup>）や『瑞応図』（瞿曇悉達『開元占経』所引<sup>4)</sup>）といった資料にはその具体的な内容が記されている。それによると黄帝は白澤の言葉をもとに図を描かせ、鬼神の

1) 岡部美沙子「白澤研究の現状と課題」、『史泉』第115号、関西大学史学・地理学会、2012年1月、p.41

2) 『抱朴子』内篇の巻13「極言」に「窮神奸則記白沢之辞」とある。

3) 「黄帝狩東至海、登桓山、於海濱得白澤神獸、能言達於萬物之情。因問天下鬼神之事、自古精氣爲物、遊魂爲變者、凡萬一千五百二十種、白澤言之、帝令以図寫之、以示天下。帝乃作祝邪之文以祝之」

4) 瑞応図曰「黄帝巡於東海、白澤出能言語達知萬物之精、以戒於民爲除災害、賢君德及幽遐則出」

害を除いたとされる。そのため、白澤は黄帝のような「徳のある王者の前に出現する獣」として人々に捉えられるようになり、中国皇帝の鹵簿では白澤を象った旗が掲げられ、皇帝の徳を象徴するために白澤の図像が用いられた。また、黄帝が白澤の言葉をもとに作ったとされる『白澤図』は、その知識を持っていれば鬼神を避けることができるとされ、次第に白澤そのものが「辟邪」の性質を持つと考えられるようになっていく。

白澤をはじめ、神獣は実在しない動物である場合がほとんどであり、古の人々の寓意的・象徴的思惟がその図像には多分に含まれている。言いかえるならば、人々が何らかの意図を持って生み出したものが神獣であり、人々の瑞祥思想にも関係し、文化の一端をなすものといえる。そしてそれが形象として表出したものが神獣図像である。神獣図像を研究することは、そうした古の人々の民俗的側面を明らかにする一助となるはずである。

同時に、神獣図像の研究は図像学の観点においても重要な意味を持っていると言える。神獣図像を含む吉祥・祥瑞の図像は中国だけでなく東アジアの各地でみられるが、そうした図像の分析が進むことで、図像の解釈を可能にするだけでなく、東アジア地域における図像の伝播と人々の受容の様相を明らかにできるのではないだろうか。

本論の目的は、そうした神獣の一種である白澤の図像、特に龍身の白澤図像を事例に、その図像が東アジア地域でどのように伝播し、受容されてきたのかを明らかにすることである。特に龍身の白澤図像に着目するのは、龍身の白澤図像が東アジアの国々（中国、朝鮮、日本、琉球）で確認されており、地域間の比較が行えるためである。

白澤の図像の伝播・受容を考察する上で注目すべき点は、地域によって主流となる図像が異なってい



図1 『正徳大明会典』



図2 『三才図会』



図3 東京国立博物館蔵狩野派模本

るということである。中国や朝鮮では虎首龍身（図1）<sup>5)</sup> や獅子型（図2）<sup>6)</sup> のものが資料の多数を占めているが、それに対し、日本や琉球では人面牛身の白澤図像（図3）が主流となっている。

先行研究では、こうした地域間での図像の差異がなぜ生じたのか、日本や琉球で見られる人面牛身図像の発生地はどこかという問題に、未だ明確な答えが出されていない。その理由は、中国の白澤図像の数が少なく、比較研究などをするにあたり十分な検討が行えなかったからである。

本論で取り上げる、中国陝西省の西安戸県の白澤の彫像は、白澤に関する先行研究でこれまで事例として取り上げられてこなかったものであり、数の少ない中国の白澤資料を補うものである。その図像的特徴は、白澤図像の解釈をより進めるだけでなく、龍身・牛身どちらの図像にとっても、その伝播・受容を考える上で非常に重要な位置にあるとみている。

そこで本論ではまず白澤が生み出された中国の龍身に関する資料を概観し、龍身白澤図像がどのような用途に用いられ、その特徴がどのようなものであるのかを考察する。続いて朝鮮・琉球・日本の龍身白澤図像をまとめ、当該地域での図像の用途や役割から、中国の龍身図像が東アジアの国々でどのように受容されたのかを考察したい。さらに、西安戸県の白澤像の分析を行い、戸県の白澤像が中国の白澤図像の中でどのような位置付けとなるのか、また、戸県の白澤像の持つ特異性は何かを明らかにし、それを手がかりとした上で、龍身白澤図像の東アジア地域における伝播と受容の様相を明らかにしたい。

5) 『正徳大明会典』（汲古書院、1989年6月）より

6) 王圻編『三才図会』（上海古籍出版社、1988年6月）より

## 1、中国の白澤図像

白澤が生み出されたのは古代中国である。そのため、中国の白澤像が東アジア地域の白澤図像の大本となるはずである。他地域と比較するためにも、中国の白澤図像がどのようなものであるのかをまずは考察したい。

中国において、白澤の外見に触れている資料としては、まず『元史』の白澤旗の記述があげられる。『元史』巻79輿服志2には以下のようにある。

白澤旗、赤質、赤火焰脚、繪獸虎首朱髮而有角、龍身<sup>7)</sup>。

また、明の王圻編『三才図会』の白澤旗の条には以下のような文があり、白澤旗の図像も載せられている(図4)<sup>8)</sup>。



唐六典武庫令有白澤旗。宋制旗二赤質繪白澤形龍首綠髮戴角四足、爲飛走狀。元制赤質黃欄赤火焰脚繪獸虎首朱髮而有角龍身<sup>9)</sup>。

この『三才図会』の記載から、宋代の白澤が「龍首」であるのに対し、元では「虎首龍身」になっていることがわかる<sup>10)</sup>。

このほか、白澤を龍身とする資料としては、明・李昱撰『草閣詩集』の文集部、雜著の項に載せられた「白澤賦」<sup>11)</sup>が挙げられる。「白澤賦」には以下のようにある。

桓山之陽溟海之北粵有神獸名為白澤、麤角而鼈趾、龍身而虎額、牙參差而礪銳、目閃爍而洞射。

「白澤賦」は白澤の姿を、麤の角と鼈の足をしており、龍身で虎額であると述べている。

この龍身白澤図像の初出というべきものは正徳『大明会典』の白澤図像(図1)である。これとよく似た図像として万暦『大明会典』の図像(図5)<sup>12)</sup>が

図4 『三才図会』白澤旗

7) 『元史』、中華書局、1976年4月p.1971

8) 王圻編『三才図会』(上海古籍出版社、1988年6月)より

9) 王圻編『三才図会』巻3儀制、p.1871

10) この点について、北京大学中国語文学系系の陳泳超教授より、中国の白澤図像は虎首龍身型と龍首獸身の二種類であり、『三才図会』の獅子型図像は龍首獸身の図像ではないかとお指摘をいただいた。

11) 明・李昱撰『草閣詩集』(『景印文淵閣四庫全書』第1232冊集部171別集類、台湾商務印書館、1985年)参照。

12) 李東陽等撰『大明会典』(文海出版社、1964年3月)より

ある。両者ともに体に鱗があり、肉食獣を思わせる脚をしている。頭部には角が二本あり、顔には虎のような縞模様がある。この両『大明会典』の図像は、『三才図会』の白澤旗の項に見られた「虎首龍身」の白澤図像と見てよいだろう。

また、『三才図会』巻4鳥獸の項には白澤の図像（図2）が載せられている。こちらは両『大明会典』の図像と異なり、体には鱗が無い。

『三才図会』にはさらに巻2衣服の項に白澤補の図（図6）<sup>13)</sup>が載せられている。こちらの図像は体に鱗が無く、図2の白澤像に近い。



図5 『万曆大明会典』



図6 『三才図会』 白澤補

『明史』巻67輿服志3によれば、公・侯・駙馬・伯の補が制定されたのは洪武24年（1389）のことである。

〔洪武〕二十四年定、公、侯、駙馬、伯服、繡麒麟、白澤。文官一品仙鶴、二品錦鷄、三品孔雀、四品雲雁、五品白鸛、六品鷺鷥、七品鴻臚、八品黃鸝、九品鶻鶻；雜職練鵲；風憲官獬廌。武官一品、二品獅子、三品、四品虎豹、五品熊羆、六品、七品彪、八品犀牛、九品海馬。又令品官常服用雜色紵絲、綾羅、綵繡。官吏衣服、帳幔、不許用玄、黃、紫三色、并織繡龍鳳文、違者罪及染造之人。朝見人員、四時並用色衣、不許純素。

以後、両『大明会典』においても同様に、「公・侯・駙馬・伯」の身分の者が白澤と麒麟の補服を身に付けることが規定されている。

この白澤補については、近年発掘された明代墓の出土資料からもその図像がうかがえる。江蘇省南京

13) 王圻編『三才図会』（上海古籍出版社、1988年6月）より

徐備墓（図7-1、7-2）<sup>14)</sup>、江蘇省泰州儲淑貞墓（図8）<sup>15)</sup>、及び北京南苑葦子坑明代墓（図9）<sup>16)</sup> から、それぞれ白澤補と思われる補子が出土している<sup>17)</sup>。



図7-1 南京市博物館蔵 徐備墓出土白澤補服



図7-2 南京市博物館蔵 徐備墓出土白澤補

14) 南京市博物館より提供いただいた。

15) 泰州市博物館「江蘇泰州明代劉鑑家族墓発掘簡報」（『文物』2016-6）より

16) 黄能馥・陳娟娟『中国服飾史』（上海人民出版社、2004年）より

17) 詳細は「明徐達五世孫徐備夫婦墓」（『文物』1982-2）、「江蘇泰州明代劉鑑家族墓発掘簡報」（『文物』2016-6）、王為剛・潘耀「泰州出土明代補子賞析」（『文物鑑定与鑑賞』2011年12期、時代出版伝媒股份有限公司）及び黄能馥・陳娟娟『中国服飾史』（上海人民出版社、2004年）を要参照。



図8 泰州儲淑貞墓出土補子



図9 北京南苑葦子坑明代墓出土白澤補

徐備が亡くなった正徳年間（1506-1521）は、正徳『大明会典』巻58官服2文武官冠服の「常服」の項に「公侯駙馬伯麒麟白澤」とあることからわかるように、「公」の位の者は官服に麒麟か白澤の補をつけることが定められている。徐備は「魏公」であったので白澤の補をつけていたと考えられる。徐備の補子の白澤は頭部には二本の角、体には鱗があり、肉食獣の脚を思わせる四肢をしている。体は横を向き、顔だけこちらを振り返るような態勢などから、正徳『大明会典』の白澤補を模した、龍身の白澤図像であるといえよう。残念ながら退色してしまっており、白澤の体色は不明である。

儲淑貞については詳しい来歴は不明であるものの、同じく泰州市内に墓のある儲罐（1457-1513）の一族である可能性がある。儲淑貞墓からは白澤補の他、麒麟補二点が出土している。王為剛・潘耀「泰州出土明代補子賞析」<sup>18)</sup>では図8の補子も麒麟補であるとしているが、他の二点の麒麟補と比べると、その図像の脚部が明らかに異なる。他の二点は蹄を持つ麒麟図像であり、この図8の補子をそれらと同様に麒麟とみなすには無理がある。儲淑貞が麒麟補を持つ身分であったことから、白澤補を持っていたとしても不思議はなく、公・侯・駙馬・伯の身分の者が麒麟と白澤の補の両方を持つことが可能であったとみられる。

儲淑貞墓の白澤補も体の前脚部分に鱗が見られるが、顔の造作がはっきりとしないため、「虎首」であるかは判然としない。

南苑葦子坑明代墓は、正徳帝（位：1505-1521）の皇后である孝静毅皇后の父・夏儒夫婦の墓と推定されている<sup>19)</sup>。『明史』夏儒伝によると、夏儒は正徳2年（1507）慶陽伯に封ぜられ、正徳10年（1515）に亡くなっている。そのため、こちらの補子も正徳『大明会典』に則ったものである<sup>20)</sup>。

この他、明代に刊行された類書にも白澤図像（図10～15）が載せられている<sup>21)</sup>。

18) 王為剛・潘耀「泰州出土明代補子賞析」（『文物鑑定与鑑賞』2011年12期、時代出版伝媒股份有限公司）

19) 墓を調査した北京市文物工作隊の報告書「北京南苑葦子坑明代墓清理簡報」（『文物』1964-11）による

20) この北京南苑葦子坑明代墓の調査が行われたのは1961年のことであり、現在この補子の所在は不明である。

21) 図9～14はすべて坂出祥伸・小川陽一編『中國日用類書集成』（汲古書院、1999年9月）に拠る。



図10 『五車拔錦』



図11 『三台萬用正宗』



図12 『万用正宗不求人』



図13 『万書淵海』

これら類書の白澤図像は、頭部に二本の角があり、体が鱗で覆われているもので、体を横向きにし、首だけをこちらに向けている姿は、正徳・万暦両『大明会典』の図像と同じ形態であり、両『大明会典』と同系統の図像だと考えられる。しかし、その図像をよく見てみると、徐々にその顔が獣面から人面とも受け取れそうなものへと変化しており、その過程で頭部の二本の角が消失していく。本来は虎首であったものが、模倣を繰り返すうちに図像が変容していったのであろう。



図14 『五車万宝全書』



図15 『妙錦萬宝全書』

これら類書中の白澤図像に付された文章は『三才図会』と同系統の内容を示し、「東望山」なる山に白澤があり、黄帝の前に白澤が姿を現したことを述べている。つまり、体表に鱗を持つ龍身の白澤図像は、そうした瑞獣としての性格を持っていると捉えられていたと考えられる。ただし、『三才図会』とは明らかに姿形が異なっているため、これらの類書の大本となった書籍は、図像は『大明会典』の系統の資料から、文言は『三才図会』の系統の資料からそれぞれ継承しているとみられる。

龍身の白澤図像は、「白澤旗」のように皇帝鹵簿に用いられ、皇帝の徳を象徴するものとして、また、明代からは官服の意匠として公・侯・駙馬・伯の身分を示すものとして用いられていた。その一方で、類書中にも龍身の白澤図像が描かれ、瑞獣、靈獣としての白澤の威容を伝えている。龍身白澤図像は「龍身」であることによって、白澤の瑞祥性を効果的に示しているといえる。

白澤の容貌については、近年興味深い論文が出されている。复旦大学古籍整理研究所の何凌霄の「“白澤”考論」である。この論文によれば、“澤”、“皋”、“虎”の三文字は通用・仮借の関係にあり、白澤の原型は虎だとしている<sup>22)</sup>。何の指摘は文字の音の解釈に基づくものであり、これまでとは異なった切り口であるといえる。

これまでも、白澤を獅子の一とする資料<sup>23)</sup>はあったが、それとは異なる系統の資料として、牛身の白澤資料が挙げられる<sup>24)</sup>。天地の間に存在する様々な瑞祥についてまとめた類書の類である唐の薩守愼

22) 何凌霄「“白澤”考論」p.52 (『雲夢学刊』第34期第6巻、2013年11月)

23) 李時珍『本草綱目』の獅子の項目に「一名白澤」とあり、『西遊記』には「白澤獅」という名で書かれている。

24) 牛身白澤図像については、熊澤美弓「神獣「白澤」と文化の伝播」(『愛知県立大学文字文化財研究所年報』第3号、2010年3月)及び岡部美沙子「白澤研究の現状と課題」等に詳しく記載されている。

『天地瑞祥志』の図像(図16)<sup>25)</sup>や、唐の澄観『華嚴大疏鈔』<sup>26)</sup>、敦煌の『十吉祥講經文』<sup>27)</sup>の文殊菩薩に関連した記述がそれである。

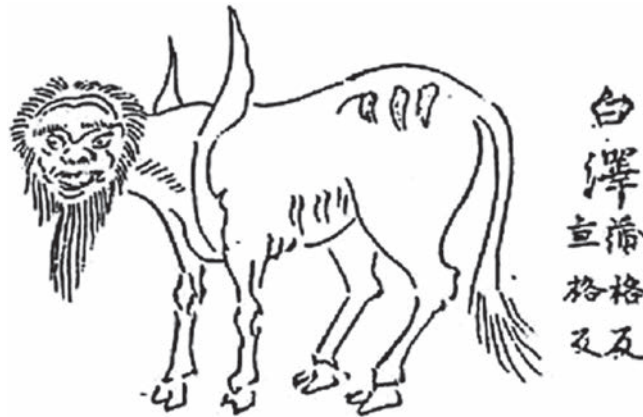


図16 『天地瑞祥志』

ただし、『天地瑞祥志』は中国ではすでに散佚しており、日本の京都大学と前田育徳会尊経閣文庫、及び石川県金沢市立玉川図書館加越能文庫にその抄本が残るのみである。さらにその著者についても諸説あるため<sup>28)</sup>、この資料だけをもって中国で牛身図像が発生したと決定づけるには、根拠として弱いと言わざるを得ない。

『華嚴大疏鈔』と『十吉祥講經文』は、図像こそ載せていないものの、白澤と牛を結び付ける記述が見られる。両者には文殊菩薩が生まれた時に起こった十の吉祥についての記載があり、その十の吉祥の一つとして「牛生白澤」という事象が起こったことを挙げている。

これらの資料から、牛身の白澤の発生地もまた中国である可能性が指摘できる。筆者が調査を行った西安戸県の白澤像は、そうした牛身の白澤像と、中国で主流となっている龍身白澤図像を対としたものである可能性を有している。この図像については後ほど改めて考察したい。

## 2、東アジア地域への龍身白澤図像の伝播

中国の龍身型白澤図像が、どのように東アジア地域の国々へと伝播し、受容されたのか。それを明ら

25) 薩守眞撰『天地瑞祥志』(薄樹人主編『天文卷』河南教育出版社、京都大学蔵)より

26) 『華嚴大疏鈔』は唐代に華嚴宗の僧・澄観(738-839)によって著された華嚴經の注釈書とされる。

27) 福井文雅・松尾良樹他訳『大乘仏典<中国・日本篇>』第10巻(中央公論社、1992年1月)によれば、ロシアのエルミタージュ博物館所蔵のオルデンプルグ文書(Φ-223)が、周紹良・白文化編『敦煌変文論文録』(上海古籍出版社、1982年)に採録された際に「十吉祥講經文」と題がつけられたものとしている。

28) 『天地瑞祥志』の著者薩守眞については、唐の人とする説と、新羅の人とする説がある。これについては、水口乾記、陳小法「日本所蔵唐代佚書『天地瑞祥志』略述」(『文献』第1号、2007年)や、劉捷「『天地瑞祥志』からみた『山海經』の受容と伝播」(山口大学大学院東アジア研究科『東アジア研究』13、2015年3月)などに詳しい記載がある。

かにするために、朝鮮・琉球・日本の龍身白澤図像を整理し、考察したい。

朝鮮の史料には、「白澤旗」の言葉が見られる。その初出は『高麗史』である。『高麗史』 卷72志26輿服の鹵簿の条には、「白澤旗」「白澤大旗」「白澤中旗」の記述が見られ、以後、『国朝五礼儀序例』、『国朝五礼序例』等の資料にもその名が見える。

白澤旗は『国朝五礼儀序例』などに図が載せられている。(図17)<sup>29)</sup> また、韓国ソウルにある国立古宮博物館に実物が展示されている。(図18)

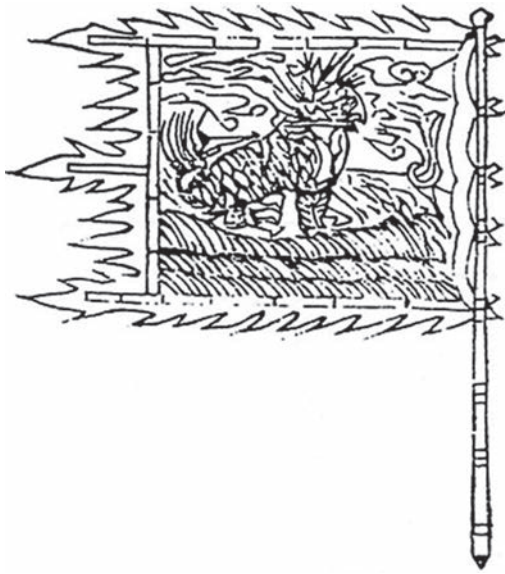


図17 『国朝五礼儀序例』



図18 国立古宮博物館蔵白澤旗  
(森部豊氏撮影)

『国朝五礼儀序例』の白澤旗の図像は細部を判別することが難しいが、体には鱗と思われる書き込みがあり、龍身の図像と見てよいだろう。国立古宮博物館の白澤旗の図像も、体に鱗のある龍身である。しかし、顔の部分には斑のような模様が描かれており、「虎首」とは異なった獣の頭をしている。

また、朝鮮には「白澤胸背」と呼ばれる補子の図像も残されている。朝鮮王朝第19代国王肅宗（位：1675-1720）の第二王子延祜君の肖像画の袍服の意匠がそれである。詳しくは拙稿で述べた<sup>30)</sup>が、この白澤胸背も鱗のある龍身の白澤である。この延祜君の図像からは白澤補の色彩が看取される。延祜君は緑色の袍服を纏っており、その胸部に鮮やかな金糸で白澤の刺繍が施され、白澤胸背を身に付ける者の身分の高さをうかがわせる。

朝鮮にはこうした白澤補の図像が伝わっているが、琉球にも白澤補が伝えられている。『歴代宝案』によると宣徳3年（1428）に明の皇帝より琉球国王尚巴志へ「織金胸背白沢緑一匹」が贈られており<sup>31)</sup>、こ

29) 『国朝五礼儀序例』（『国朝五礼儀』民昌文化社、1994年3月）より

30) 岡部美沙子「白澤研究の現状と課題」、『史泉』第115号、関西大学史学・地理学会、2012年1月、p.52

31) 沖縄県立図書館史料編集室編『歴代宝案』訳注本第1冊、沖縄県教育委員会、1994年3月

れ以降にも数回、白澤補が贈られていた記述がみられる。『歴代宝案』には図像は載せられていないが、明朝より頒賜された品であるため、白澤補は両『大明会典』に載せられたような虎首龍身の図像とみてよいだろう。「織金」という言葉から、朝鮮の延祔君の白澤胸背と同じように金糸で白澤を表現したものであると考えられる。

朝鮮・及び琉球の龍身白澤図像は、こうした胸背や旗といった中国に倣った用途に用いられていることから、朝貢によって龍身白澤の図像が伝播し、明朝の制度を模するという形で受容されていたことがわかる。

ただし、白澤補は琉球国王だけでなく尚徳王・尚円王の王妃にも贈られており、朝鮮や琉球といった進貢国には両『大明会典』で示された官服の位階が適用されていないととることもできるため、中国の制度に倣いつつも、細かい部分は適宜変更されていたとみるべきだろう。

この龍身の白澤図像は日本にも伝わっている。それが『怪奇鳥獣図巻』の白澤図像（図19）<sup>32)</sup>である。



図19 『怪奇鳥獣図巻』

『怪奇鳥獣図巻』は『山海経』に見られるような空想上の獣を描いており、それを踏まえると何らかの中国の資料を参照して成立したのは間違いない。『怪奇鳥獣図巻』の白澤図像もやはり体表面を緑色の鱗が覆っており、四肢には鋭い爪が描かれている。頭部は虎というよりも獅子と龍を折衷したような動物の容貌で描かれ、頭部には二本の角が見られる。体は横を向き、顔をこちら側に向けている姿は、『五車抜錦』を始めとする中国の類書中の白澤の姿態に近い。

顔と体を同じ緑色で描いている点は、類書の白澤図像からは読み取れない重要な点である。体表の鱗や姿態など、類似する部分も認められることから、おそらく『五車抜錦』等の類書の白澤図像とその系

32) 伊藤清司監修『怪奇鳥獣図巻』（工作舎、2001年1月）より

統の源を同じくすると考えられるが、顔を獣のそれとして描いており、角も明確に描きこまれているこちらの図像の方がより大本となる図像に近いのではないだろうか。

朝鮮や日本の龍身白澤図像の体色が緑色や青色で塗られているというのは、白澤の体表を覆う「鱗」というものを表現する上で色の選択が働いたためだと考えられる。しかしそれだけではなく、中国における白澤の体色そのものが緑色や青色であった可能性もある。

その可能性を示すものとして、現在沖縄県立博物館に所蔵されている白澤の図（図20）が挙げられる。



図20 沖縄県立博物館蔵の白澤（筆者撮影）

この白澤はその姿形が『三才図会』の白澤（図2）に近い。ライオンのような茶褐色の身体、顔や肩から背にかけて、さらに後脚の一部が青緑色に着色されている。図の右上には「白澤図倣元人筆法」とあり、この絵が中国の図像を模写したものであることをうかがわせ、中国における白澤が、緑色や青色で描かれていた可能性を示唆する。

いずれにせよ、日本の龍身白澤図像の伝播は、明への朝貢によってというよりも、『山海経』の靈獣の類を描いたような類書の輸入という形で伝播したと考える方が自然であろう。ただし、日本の龍身白澤図像は管見の限り『怪奇鳥獣図巻』一点のみであるため、今後同様の類書の発見が待たれる。

日本では室町時代以降、龍身白澤図像よりも人面牛身図像が病除けや旅の護符として、また、浮世絵など手軽に入手できる物として庶民の間で圧倒的に流布しており、その一方で、こちらも人面牛身図像に比べれば少数ではあるものの、狩野派が『三才図会』の獅子型に近い姿を持つ、白色の白澤図像を描

いている<sup>33)</sup>。

日本で龍身白澤図像が広まらなかったのは、こうした他の白澤図像が広く受容されていたためだと考えられる。

### 3、龍身白澤石像の出現—西安戸県の白澤像

中国の龍身白澤図像は、官服や旗の意匠としてのみならず、石像の意匠にも用いられている。それが筆者が調査を行った、陝西省西安市戸県玉蟬郷の漢陂湖北岸に位置する、秦の萇陽宮<sup>34)</sup> 門前に置かれていた石像一対である。現時点で、中国国内において白澤の石像とされているものはこの戸県のもののみで、他例を見ない<sup>35)</sup>。そのため、この石像の図像的特徴を分析することは、中国の龍身白澤図像を考察する上で欠かすことができない。また、この図像が牛身白澤である可能性もあり、牛身の発生地を考察するためにも重要な資料である。

現在秦の萇陽宮跡とされている場所は、明の永楽13年（1415年）に置かれた玄真観という道観の旧地であり、清代には東岳廟が置かれていたとされる<sup>36)</sup>。

程義、王亜涛は、白澤像一対はこの玄真観の旧物であるとしており、また、『戸県文物志』では永楽17年（1419年）（『戸県文物志』では「洪武17年（1419）」とあるが、永楽17年の間違いだろう）に東岳廟が創建された時の彫刻だとしている<sup>37)</sup>。

大きさは、それぞれ高さがおよそ150センチメートル、胸幅がおよそ80センチメートルほどである。もとはこの萇陽宮跡とされてきた遺構の門前に配置されていたが、調査当時には一対の内の片方が盗難に遭い行方不明となっていたため、残されたもう一方も、盗難防止のため、萇陽宮跡の隣家の中庭に避難させられていた。2016年に盗難に遭った石像が発見され、同年八月、再び萇陽宮跡の門前に配置された。

便宜上、門に向かって左側に配置された石像（図21）をA、右側に配置された石像（図22）をBと呼ぶこととする<sup>38)</sup>。

33) 日本国内での人面牛身図像の広がり、及び狩野派白澤図像については、熊澤美弓「神獣「白澤」と文化の伝播」（『愛知県立大学文字文化財研究所年報』第3号、2010年3月）、同「近世武家における神獣白澤の受容」（愛知県立大学文字文化財研究所『愛知県立大学文字文化財研究所紀要』2、2016年3月）、岡部美沙子「白澤研究の現状と課題」等に詳しく記載されている。

34) 漢陂湖北岸の秦の萇陽宮跡については、程義、王亜涛「秦漢萇陽宮地望考」（『咸陽師範学院学報』第21巻第1期、2006年2月）によって、秦の萇陽宮跡ではないことが明らかにされている。

35) 佐々木聡『復元白澤図 古代中国の妖怪と辟邪文化』（白澤社、2017年1月）によると、中国には「天龍白澤」という亀形の白澤像もあるということだが、その来歴は不明で、かつ白澤と天龍を混合したものであると佐々木氏により指摘されているため、来歴も含め、今後の調査が必要である。

36) 実際の秦萇陽宮は、1982年に戸県白廟郷曹村で発見された、元・延祐6年（1319年）の「創建崇真観碑」の碑文に「秦之萇陽宮址在焉，信夫天壤間自昔為佳处也」という記述があることから、現在の玉蟬郷の萇陽宮址ではなく、白廟郷曹村に萇陽宮があった可能性が高いとされている。

37) 『戸県文物志』編集委員会編『戸県文物志』陝西人民教育出版社、1995年12月

38) Aの写真は筆者撮影、Bの写真は戸県文物管理所所長の王亜周氏より提供いただいた。



図21 (A) 筆者撮影



図22 (B) 王亜周氏撮影



図23 Aの脚部分



図24 Bの脚部分

筆者が石像の調査を行った際、現地の方から聞き取りを行った。その結果、地元の人々もこの石像一対を白澤として認識していることがわかった<sup>39)</sup>。

この二つの白澤図像を比べてみると、その脚もとに大きな違いがあることがわかる。Aの白澤はその脚が爪の生えた肉食獣を思わせるもの（図23）であるのに対し、Bの白澤は脚が偶蹄の草食動物のもの（図24）である。

しかし、両者共に体に鱗があり、頭部に二本の角を持つ点、さらに顔が非常に良く似ている点から、これらが一対として造られたのは間違いない。

39) この石像一対を「白澤」とであると明記したのは『戸県文物志』が最初であるが、この『戸県文物志』がこの石像を白澤としたのも、こうした地元の人々からの聞き取りによっているとみられる。



図25 Aの側頭部及び頭部正面



図26 Bの側頭部及び頭部正面

A、Bともに角は二本で眉間から眼窩へかけての造作、鼻の形なども良く似ている。ただし、Bの白澤にはAに見られるような鋭い牙が見られない。欠けてしまったとも考えられるが、脚部が草食獣のものであることを踏まえると、はじめから無かった可能性も高い。

『中国文物地図集』では、この一対を雌雄と見ている<sup>40)</sup>が、これら脚の様相が異なった石像が対になっていることについて、筆者は典型的な中国の龍身白澤と、牛身の白澤を対にした貴重な例ではないかと考えている。Aの白澤像は中国の主流とも言うべき龍身のもので、日本に伝わる『怪奇鳥獣図巻』の白澤図像（図19）が最も類似しているように見受けられる。二本の角を持つその頭部は、虎というよりも獅子と龍とを混交したような、他にあまり見ない特徴的な顔立ちをしており、口元には鋭い牙が見える。

40) 国家文物局主編『中国文物地図集』陝西分冊、西安地図出版社、1998年12月、p.150

四肢は肉食獣を思わせる爪を持つもので、龍身白澤の特徴を備えているといえる。

一方、Bの白澤像は、Aと良く似た姿をしつつも、口元や脚部など細部では草食獣を思わせる。偶蹄は牛のそれであり、牛身の白澤像とするならば、中国における牛身白澤像の具体的な事例となり、牛身の白澤の発生地を中国とする説を後押しする。

しかし、戸県調査時に、この図像について北京大学中国語文学系の陳泳超教授から、白澤と麒麟を対にした事例ではないかと、別の可能性を提示された。

中国において、蹄を持つ麒麟と獅子のような足を持つ麒麟の像が対になっている事例がこれまでも幾つか発見されており、それらが白澤という認識が無かったために、麒麟の対とされたと陳教授は指摘している。

もしそうした獅子の脚をした図像が麒麟ではなく白澤であるならば、二種類の動物を対にするという事例が他にもあることになり、現段階ではそうした麒麟と白澤を対にしたと考えられる図像資料の収集及び分析が課題である。

戸県にはさらに、漢陂湖岸の秦萇陽宮跡の他にもう一体、白澤と思われる石像がある。戸県甘河鎮運渠店村の龍王廟前にあるこちらの像は、もともとは甘河鎮の古い橋の飾りだったもので、それを村人が現在の場所へと移したそうである。こちらは地元では獅子の対とされているが、明らかに左右の石像の容貌が異なっており、別の動物を組み合わせたものである。



図27 白澤と思われる石像（筆者撮影）



図28 獅子の石像（筆者撮影）

図27の石像は体に鱗があり、頭部には角がある。また脚は肉食獣的な爪の生えたものであり、漢陂湖岸の秦萇陽宮跡の白澤像に近い造形である。それに対し、図28の石像は獅子特有の渦を巻く鬣が表現されており、体に鱗は無い。これらの図像は、一対の石像といえども左右で別の動物を組み合わせている典型的な事例であり、そのため、先述の漢陂湖岸の秦萇陽宮跡の白澤像が、麒麟と白澤を対にした可能

性もまた残されていると言わざるをえない。

いずれにせよ、これらの戸県の白澤図像からうかがえるのは、明代に公・侯・駙馬・伯の官服の意匠と定められた白澤図像ではあるものの、その図像の用途に身分的な制約が及ぶのは官服の意匠のみであって、このような彫像に関してはその限りでは無かったということである。

例えば麒麟のような、もともとは王者の徳に応じて現れるとされた神獣であっても、その図像が民間で広く用いられるようになっていくことを考えれば、白澤もまた、その可能性が大いにあると言える。

しかし、官服や鹵簿の旗の意匠となっているのは龍身の白澤のみであり、公的な図像には龍身の白澤が採用されていたと考えられる。それに対し、牛身の白澤は『華嚴大疏鈔』や『十吉祥講経文』など仏教関連資料や、玄真観のような道観、『天地瑞祥志』のような類書の類など、宗教や瑞祥思想と関連する資料に採用されたことがわかる。

図像の違いによって採用される資料の性質が異なっていることは、日本でも同様のことが見受けられるため、中国・日本ではそうした図像の取捨選択が行われているといえるのではないだろうか。

## おわりに

白澤は古代中国では皇帝鹵簿の白澤旗のような「王者の徳を象徴する」神獣として捉えられてきたが、明代には白澤補に代表されるように皇帝から臣下の身分を表すものへと一段格が下がる。一方で、『白澤図』に代表される「辟邪の獣」としての性質もあり、それが『華嚴大疏鈔』や『十吉祥講経文』など仏教関連資料や、玄真観のような道観、『天地瑞祥志』のような類書の類などの、宗教や瑞祥思想と関連する資料に採用された背景にあるのではないだろうか。

しかし、白澤旗や白澤補など、いわば「公」的な資料の図像は龍身のみであり、牛身の白澤図像はそうした資料中には見つかっていない。

日本では幕府御用絵師である狩野派が獅子型白澤を描いているが、その一方で民間では旅や病除けの護符として、あるいは浮世絵として人面牛身の図像が広まったことを鑑みるに、日中両国では公的な白澤図像は為政者によってその図像が取捨選択されたことが指摘できるのではないだろうか。また、朝鮮、琉球にはそうした中国の公的な白澤図像が伝播し、中国の制度を倣うような形で受容されてきた。

これが示すのは、そうした公の白澤図像は、その図像を用いる為政者の権威付けのために利用される側面が強く、図像が人々に与える印象・効果を考慮に入れば、牛身よりも龍身の白澤の方が相応しいとされたということである。そのため、あえて牛身ではなく龍身の図像を取捨選択したということができるのではないだろうか。

西安戸県秦蕢陽宮跡とされる遺構の門前の白澤像が牛身と龍身の白澤像の対であったとするなら、牛身の発生地を中国とする有力な資料になる。さらに、この白澤像は、龍身白澤図像が道観に付随する彫像の意匠として用いられたことを示す貴重な事例である。

しかし戸県の白澤像は、陳教授が指摘するように、麒麟と白澤の組み合わせである可能性があり、今後の他の資料の収集及び考察が必要である。

こうした二種類の神獣、特に白澤と他の神獣を対にするという習慣があったのだとすれば、今後中国

内の他の地域で白澤図像を見つける手掛かりになるはずである。

※本論は2015年8月於京都の東アジア怪異学会第100回記念研究会、及び2015年10月於瀋陽の中国民俗学会2015年年会での発表をもとに加筆・改稿したものである。

